chapter.02

仏教論理学研究の現在と人文情報学

小野 基

1. はじめに

科研費基盤研究 S「仏教学新知識基盤の構築」の枠組みにおいて、筆者は過去 4 年間にわたり、ほかの二つの科研費プロジェクト（科研費基盤研究 B「インド仏教論理学の東アジア世界における受容と展開――因明（いんみょう）学の再評価を目指して」［2015-17 年;研究代表者:信州大学・護山真也］およびその後継プロジェクトである科研費基盤研究 B「インド論理学と東アジアの因明を架橋する『因明正理門論（しょうりもんろん）』の再検討」［2018-22 年；研究代表者：小野基］）と連動させつつ、筆者自身が現在中心的に取り組んでいるディグナーガと彼以前の仏教論理学の思想史をめぐる研究を遂行し、その成果の一部を国内外で口頭発表するとともに、数編の論文を執筆・公刊した[*1]。

こうした筆者の専門領域の個別研究については章末注に記載した拙稿をご参照いただくとして、本稿では、筆者の個別研究を一つの視座としながら、近年の仏教論理学研究の現状と、それが抱える人文情報学的課題を改めて整理し直し、「仏教学新知識基盤の構築」という本プロジェクト課題に対する仏教論理学研究の側からのいくつかの問題提起を行いたいと思う。

2. テクストの電子化など

インド仏教論理学の研究は、仏教学のほかの多くの研究分野と同様に、もっぱら文献学的なアプローチを用いる研究分野であり、言うまでもなくその一次資料は言語テクストである。だが、インドだけでも 3 ～ 12 世紀の約一千年に

わたる仏教論理学の思想史の中で作られた多岐にわたるテクストの伝承状況は極めて複雑である。梵文（サンスクリット）原典も少なからず現存し、他方でチベット訳文献は複数の版本全集の中に包括的に残存しており、また古い時代の文献には断片や漢訳のみでしか残っていないものもある。

人文情報学的アプローチとしてまず重要なのは、これらのテクスト（の刊本や版本）を適切な形で電子化（＝機械可読化）する作業であった[*2]。筆者の仏教論理学分野における梵文テクストの電子化の試みは、インド学仏教学分野全体の中でも先駆的なものの一つであったと自負している。筆者が大型計算機を用いてダルマキールティ（Dharmakīrti; 7 世紀頃）の主著の梵文テクストの入力を行ったのは 1983 ～ 86 年であった[*3]。まだパソコン普及以前の時代であり、筑波大学の大型計算機センター（当時）につながる研究室のコンソールの暗黒の画面上にエメラルド色の文字をひたすら打ち込んだ。当時は ASCII コードの文字しか使えなかったため、梵文テクストの電子化には相応の工夫が必要で入力には時間もかかった。この最初の入力作業では、将来的にユーザーが筆者の入力データを用いて検索などを行うことは必ずしも想定しておらず、入力データを分綴・ソートして単語索引を自動作成するプロジェクトであった（筆者が入力し Web 公開されているダルマキールティの梵文テクストが分綴（ぶんてつ）されているのはそのためである）。この電子データをもとに東京外大アジア・アフリカ（AA）研究所の小田淳一氏の協力でダルマキールティの *Pramāṇavārttikasvavṛtti* の単語索引を作って 1986 年には私家版を研究者仲間に配布し[*4]、また 1994 年にそれを AA 研より出版した。

その後パソコンの普及に伴い、インド学仏教学関連の研究者たちも競って研究にパソコンを用いるようになり、梵文テクストの電子化は各分野で急速に進められた。仏教論理学の分野でも、1990 年代後半から 2000 年代前半にかけて、オーストリア科学アカデミーのヘルムート・クラッサー氏によるプロジェクト、広島大学のプロジェクト（当時広島大学に留学していた現・東国大学校教授ウー・ジェソン氏や現・オーストリア科学アカデミー・アジア文化宗教史研究所長ビルギット・ケルナー氏らも協力）、Sanskrit Buddhist Canon Input Project などが遂行され、当時までに梵文校訂本が出版されていたインド仏教論理学の主要テクストがほぼすべて電子化された[*5]。また引き続き、そうした個々の電

子化プロジェクトを統合するGRETIL[*6]やSARIT[*7]のごときWebサイトも立ち上げられ（前者が古典インド語文献全般の電子テクストの包括的データベースであるのに対し、後者は特に仏教論理学関係を重視しており、その所収の電子テクストはTEI準拠の標準化を試みている点でも注目される）、梵文テクストの電子化とその利用は急速に進展した[*8]。

他方で1990年代にはAsian Classics Input Project（ACIP）が多くのインド仏教論理学文献のチベット訳を含むチベット大蔵経デルゲ版の入力・公開を開始し、その恩恵により、チベット訳文献に関しては、90年代末までに、ひとまず研究者はインド仏教論理学文献の包括的な電子データのコーパスを手に入れることができた[*9]。漢訳文献に関するSATプロジェクトの偉業に関しては、ここでは多言を要さないであろう。

かくして、今日に及ぶ以後20年あまりの研究史の中で、写本校訂やテクスト解釈などの基礎研究にあたって電子データを用いる研究の方法論が確立されつつある。言うまでもなく、並行事例を探索して解釈に役立てたり、術語の使用変遷を調べたり、引用の源泉を特定したり、梵文原典が未発見の蔵訳・漢訳テクストから原語や構文を推定したり（後述の「再建梵文」の問題を参照）、といった場合に、電子テクストとその派生物（後述のKWIC索引など）は絶大な威力を発揮している。

また他方で、以前は簡単には参照できなかった中央アジア出土の梵文写本断片などの画像資料も、ここ20年のあいだにWeb公開が進展している。仏教論理学関連で一例をあげるならば、3世紀のクシャーナ文字で書かれた古い写本断片で、揺籃（ようらん）期の仏教論理学研究の資料として貴重ないわゆるSpitzer写本「討論術章」は、1990年代末からエリ・フランコ氏によって研究され大部の書物として出版されたが[*10]、現在ではその写本断片の画像データは「国際敦煌（とんこう）プロジェクト」（The International Dunhuang Project）のWebサイト上で極めて鮮明なカラー画像で参照可能となっており[*11]、筆者も実際にフランコ氏の研究を再検討するに際して同サイトを利用した[*12]。また、今後は東アジアの仏教論理学、すなわち因明の文献研究にあたって日本古写経の参照が欠かせないが、筆者はすでに『如実論（にょじつろん）』や『正理門論』などの異読（いどく）箇所の確認に際して、上述の落合氏の日本古写経データベースから多くの恩恵を受けている[*13]。

3. KWIC 索引――今後も作る価値はあるか――

1990 年代中頃、筆者は自身の研究上の関心から、ひとまず梵文原典で残存するダルマキールティの全作品の索引を作ることの有用性を感じ、上述の電子テクストをもとに東京外大の小田淳一氏と高島淳氏の全面的協力を得て 1996 年に『ダルマキールティ梵文テクスト KWIC 索引』を作成・出版し[*14]、内外の関係者に贈呈した。分厚い冊子体であったが、単語が出現する文脈が即座にわかる KWIC（Key Word in Context）形式を用いたため（高島淳氏のプログラムによる）、内外の研究者間で非常に好評であった。通常の単語索引に対する道具としての KWIC 索引の優越性は明らかであり、しかもコンピューターを用いると通常の単語索引とほとんど同じ手間暇で作成できる。1990 年代後半、まだ電子テクストの入力が一部のテクストに限られ、またパソコンの HD の容量が小さく CPU の能力も高くなかった時点では、KWIC 索引を紙媒体で作成して研究者に配布することには画期的な意味があったと言えよう。

他方で、今日ではパソコンの機能が飛躍的に向上し、大量の電子テクスト・データのコーパスを手持ちのパソコンで瞬時に検索することが可能になったため、個々のテクストに関してわざわざ分綴などの手間をかけて KWIC 索引を作成・出版することには従来ほどの意義はないと考える向きもあるかもしれない。2006 年に筆者が再び高島淳氏（と酒井真道氏）の協力を得てジネーンドラブッディの *Pramāṇasamuccayaṭīkā* 第 1 章の KWIC 索引を作成・出版した際には[*15]、すでにそのような意見も聞かれはじめていたように思う（ただし、否定辞を分綴するなどのその後の改良により、KWIC 索引としての完成度は前述のダルマキールティ著作の索引よりジネーンドラブッディ註の索引の方が高い面もある）。

だが私見では、個別のテクストないし思想家の KWIC 索引を作成しておくことは、今後もおそらく研究上有益である。文献学的研究では、ある語を大きなコーパスの中で検索することももちろん重要であるが、ある程度限られた範囲（一つのテクストであったり、ある著者の全作品であったり、ある学派の全作品であったり）で検索する方が現実的には有意味であるケースが少なくない。

さらに、電子辞書がこれほど普及した時代に相変わらず紙媒体の辞書が用いられている現実があるように、印刷されたKWIC索引にはある種の使い勝手のよさがある。

以上の観点から、筆者は現在、三たび高島淳氏の協力を仰ぎ、1996年に作成した『ダルマキールティ梵文テクストKWIC索引』の増補改訂版の作成準備を進めている。ダルマキールティに関しては、今世紀になって新たに*Pramāṇaviniścaya*と*Hetubindu*の梵文原典写本が発見・研究され、すでにエルンスト・シュタインケルナー氏、およびパスカル・ユーゴン、苫米地等流両氏の手によって校訂・出版されたという事情もある[*16]。*Pramāṇaviniścaya*についてはすでに数年前に高島淳氏と酒井真道氏に依頼して全3章のKWIC索引を作成していただいたが[*17]、今回はその折に作成された分綴データと新たに作成中の*Hetubindu*の分綴データを用い、1996年のKWIC索引をダルマキールティ七部論書中の*Santānāntarasiddhi*（梵文原典未発見）を除くすべての梵文テクストに拡張し改良型＋増補版のKWIC索引としてWeb公開、可能であれば出版の予定である[*18]。

なお、この改訂版の作成にも該当するが、1980年代後半以降の時期にパソコンを用いて新しく校訂・出版されたテクストに関しては、出版本に基づく電子テクストの入力作業が原則必要なくなった点は看過できない。例えば上記の*Pramāṇaviniścaya*のKWIC索引作成にあたっては、シュタインケルナー氏、およびユーゴン、苫米地両氏からテクストの電子ファイルの提供を受けている。KWIC索引作成者の仕事は、この電子テクストをKWIC索引作成のプログラムに乗る形に変形（主として分綴と出版本の頁・行を書き加える作業）することだけになり、作業量は相当軽減された。原則的に1980年代後半以降に新たに校訂出版されたテクストに関しては、KWIC索引の作成はそれほどの労力をかけずに可能なのだから、作っておいて損はないのではなかろうか[*19]。

なお、電子テクストの分綴処理の自動化も進めたいところではあるが、こちらの方は1980年代の電子テクスト作成の当初から発想はあったものの30年来なかなか進展がないように筆者には見える。この間サンスクリット語辞書の電子化が飛躍的に進んでいる現状から見て、素人目には実現を妨げる難しい問題はさほど残っていないようにも思えるのだが、専門家の意見を聞きたいところ

である。

4. 電子テクストの適正化

さらに、今後もKWIC索引の作成を続けることには別の意義もあり得る。実は上述の、過去に出版された梵文校訂本をもとに入力された電子テクストの中の多くは、多数の入力ミスが残存している可能性など、それ自体がまだかなり不完全なものにすぎないのだ。このことは、これらのテクストを入力した当事者たちがおそらく一番よくわかっていることであろう。前述のように、既存のインド仏教論理学の梵文校訂本は1990年代後半から2000年代前半にかけて急速に電子化されたが、それらの作業の多くは個人や少人数のグループによるボランティア的営為であり、校正が周到に行われている電子テクストはおそらくそれほど多くはないのが実情である。これはおそらく、インド仏教論理学分野の電子テクストのみに固有の問題ではないであろうと推察される。

校正の必要性に対する意識は、上述の経緯から特に電子テキストの作成者間には強いと思われるが、「誰が、どのように」という現実問題をクリアするのは簡単ではない。なぜなら、最初の電子テクストの入力作業は意義も大きく、従って入力者のモチベーションも高かったが、校正作業は重要であるにもかかわらず同等のモチベーションを期待できない地味な作業だからである。このあたりの事情は、大量の人的・財政的資源を動員して組織的に行われたSATのような大規模プロジェクトとはかなり様相を異にしている。多くの場合、既存の電子テクストを無条件に信頼することは許されない。だが、この点に関して入力者を非難することは無論できない。入力者は自身の研究の必要に迫られてテクストを電子化し、自身の必要でその後それらを修正しながら利用しているのであって、パブリック・ドメインにアップロードされているものは、そもそも必ずしも他人の使用に供することを目的にして正確を期して作られたものではないのである[*20]。次世代の研究者諸氏には、そのような既存の電子テクストの限界を正しく認識した上で、それらを一方的に利用するだけでなく、自ら主体的にそれらを改良してゆく方策にかかわってもらいたいと考えている。

以上、要するに既存の電子データの校正作業が必要なわけであるが、その際、

わりと簡便で有力な方法の一つは、校正作業をしながらテクストの分綴を行い、KWIC索引を作ってしまうことではないかと筆者は以前から考えている（KWIC索引を作成して公表ないし出版すれば、一応「業績」にもなろう）。筆者自身は、上記のダルマキールティの梵文全作品（1996年当時）のKWIC索引作成の過程で、自ら入力したダルマキールティ作品の梵文電子データをかなりの程度まで修正することができた（無論まだ入力ミスは残存しているが）。KWIC索引の作成過程では、誤入力箇所はソートの結果としてしばしばほかの諸語とは目立って特異な形かつ単独でキーワードとして出現してくるので、ソート結果（膨大ではあるが）を概観するだけで誤入力箇所が即座に認識できるからである[*21]。

というわけで、この分野における入力済み電子テクストのKWIC索引作成は、印刷して出版することの是非はとにかく、今後もその作成とWeb公開には労力（分綴と頁行の割付（わりつけ）のみ）に見合った十分な意義があると考えるがいかがであろうか[*22]。

5. 新出梵文写本の登場

以上のように、ここ30年来のパソコンの普及に伴ってインド学仏教学分野でも研究へのパソコン利用が進められてきたが、他方で、同じ過去30年のあいだに当該分野では多くの一次資料が新たに発見ないし公開され、研究の俎上（そじょう）に上がってきているという状況がある。これは西洋古典学などのほかの文献学の研究分野と比べてみても、おそらく特徴的な現象であると言えるのではなかろうか。いわゆるガンダーラ語仏教写本の発見は好例であるが、この写本群の研究の開始は、ほぼパソコンの普及と飛躍的な性能向上と時期を等しくしているため、研究者たちには研究開始の当初からコンピューターを用いて資料の状況に即したさまざまな研究ツールを作ることが可能となった。これは画期的な状況の変化であった。

インド仏教論理学の文献に関しても、今世紀初頭頃から新たに、重要な写本が研究可能になる事例が相次いでいる。その嚆矢となったのがディグナーガ（Dignāga; 6世紀頃）の*Pramāṇasamuccaya*に対するジネーンドラブッディ

（Jinendrabuddhi; 8 世紀頃）の註釈 *Pramāṇasamuccayaṭīkā* の梵文写本の出現である[*23]。筆者は、オーストリア科学アカデミーと中国蔵学研究中心の研究協力によって可能になったこの *Pramāṇasamuccayaṭīkā* 写本の校訂研究プロジェクトに初期の頃からかかわり、また直近では特にその最終章の校訂を担当している[*24]。この写本の重要性は、何より、これがインド仏教論理学を創始したディグナーガの主著 *Pramāṇasamuccaya* に対する詳細な註釈書の、極めて伝承状態のよい梵文原典写本である点にある。*Pramāṇasamuccaya* 本体の梵文原典が未発見なのは遺憾ではあるが、*Pramāṇasamuccayaṭīkā* の梵文原典に基づいて、以前より数段精度の高い *Pramāṇasamuccaya* 本文の再建（reconstruction）が可能となり[*25]、また *Pramāṇasamuccaya* に至るディグナーガ以前の初期のインド仏教論理学史に関係するさまざまの重要な断片資料が梵文原典として参照可能となった[*26]。

さらにこの 10 数年のあいだに、上述のダルマキールティの *Pramāṇaviniścaya* と *Hetubindu* のほか、*Pramāṇaviniścayaṭīkā*（Dharmottara; 8 世紀頃）第 2 章後半～第 3 章、*Pramāṇavārttikālaṃkāraṭīkā Supariśuddhā*（Yamāri; 11 世紀頃）第 1 章などの重要典籍の大部の梵文写本が新たに出現し、現在校訂研究が進行中である。すでに前者の第 2 章の一部はオーストリア科学アカデミーのパトリック・マカリスター氏、わが国の酒井真道氏・石田尚敬氏により、第 3 章はオーストリア科学アカデミーのユーゴン氏、わが国の岩田孝氏・渡辺俊和氏により、後者の一部はフランコ氏のチームの褚俊傑氏、李学竹氏、松岡寛子氏らによって校訂・翻訳研究、ないし翻刻研究が行われている。

これらのプロジェクトにおいても、ガンダーラ語文献のプロジェクトと同様に研究の当初からパソコン環境が存在していたため、パソコンを最大限活用しながらの研究が行われてきている。従って、校訂本の出版以前にすでに電子テクストが作業ファイルとして存在している状況があり、上述の *Pramāṇasamuccayaṭīkā* 第 1 章や *Pramāṇaviniścaya* 全 3 章の KWIC 索引はそうした状況下の産物である。*Pramāṇasamuccayaṭīkā* 校訂プロジェクトでは、後続の章に関しても KWIC 索引を作成してゆく方針であり[*27]、第 6 章を担当する筆者のグループもその下準備をすでに終えている。*Pramāṇasamuccayaṭīkā* 全 6 章の校訂出版（まだかなり時間を要するであろうが）が終われば、全 6 章の電子

テクストの公開ならびにKWIC索引の作成が時を経ずに可能になるはずである。

6. 梵文再建とフラグメント蒐集

注25で言及したようにシュタインケルナー氏は、*Pramāṇasamuccayaṭīkā* の校訂プロジェクトの一環として、*Pramāṇasamuccaya* 第1章の再建梵文（還梵（げんぼん））を公表した（現在のところWebサイト上のPDFのみでの公開）。原典未発見のテクストの原文を「再建」（reconstruction）するという営みについては、その学問性について見解が分かれる面もあるが、人文情報学の観点からは、その重要性を再確認できるように筆者には思われる。

上記再建梵文PDFの序文の中でシュタインケルナー氏は、その学問的な真正性（authenticity）について慎重な留保をつけ、再建梵文を時に“*chāyā*”（「影」の意。元来はプラークリットによるジャイナ教聖典のサンスクリット訳を指す）、時に“*text in progress*”と称しつつも、その作成の意義と客観性を論じている[*28]。すなわち彼によれば、再建梵文は本来 *Pramāṇasamuccayaṭīkā* 第1章のテクスト校訂とその内容理解への必要から作成されたという点でそれ自体の学問的意義があり、そもそも余技としての副産物なのではない。また梵文で書かれた註釈書の記述に基づくため、語彙や語順の選択に高次の必然性があり、それはかつてのギュゼッペ・トゥッチ氏による漢訳仏教論理学文献の「梵訳」はもとより[*29]、ムニ・ジャンブーヴィジャヤ氏と服部正明氏による、断片とチベット訳に基づく *Pramāṇasamuccayavṛtti* の還梵の試みとも様相を異にしている。

ところで、作成された再建梵文の学問的意義をさらに高めるためには、個々の単語の選択や語順に関する信憑性の判断を読者に可能にするための記述の工夫（イタリック体・ボールド体や色の使用、重要な情報の脚注での提示など）を施した上で、「電子テクストとして」公開する、というやり方が非常に適合的であると筆者には思われる。公開が他研究者を益することは言うまでもないが、“*text in progress*”であるこのテクストは、電子テクストとしての性格上アップデートが容易な上、Web公開によって検索の網にかかりやすくなることで、それ自身の精度を高めるための他研究者からの情報のフィードバックを容易にするからである。シュタインケルナー氏は明言していないが、彼が上述の再建

梵文を紙媒体で出版せずにWeb公開としているのは、学問的な良心の問題と同時に、こうした意図があってのことと推察される。

さらに、とりわけ*Pramāṇasamuccaya*という書物に関しては、それがインド仏教論理学派という一大思想潮流の出発点になった根本テクスト（*mūla-text, sūtra*）であるという点に鑑みて学派の内外の多くのテクストとの引用関係などが予想されることから、たとえ“*text in progress*”の再建梵文であれ、公表しておく意義は大きいと思われる[*30]。

最後に、フラグメント（断片テクスト）の問題にも一言しておきたい。重要な典籍の原典の多くがすでに失われてしまっているインド学仏教学の思想研究の分野ではフラグメントの意義は大きく、2012年夏に丸井浩氏とエルンスト・プレッツ氏の主導で松本で開催された国際シンポジウムにおいても主題的に議論されたところではあるが[*31]、上述の浩瀚（こうかん）な*Pramāṇasamuccayaṭīkā*梵文原典写本によって、われわれは特に初期のインド仏教論理学にかかわる多くのフラグメントを梵文原典として手に入れることとなった[*32]。こうしたフラグメントは、作品としてのまとまりを持つものばかりとは限らず、提示の仕方が難しい面もあるが、やはり何らかの仕方で「電子テクストとして」公開することが有益であると考える。上述の再建梵文の場合と同じく、こうしたテクストこそが、多くの研究者の目に触れてその存在が認知され、また関連情報を得る手がかりが得られることを必要としているからである[*33]。

7. 今後の課題と展望

今後の課題と展望であるが、まず、上記の諸写本以外にも*Hetubinduṭīkā*の複註、ダルマキールティ著作の新出写本、*Nyāyamukha*の梵文写本など、これまで知られていなかった梵文写本が研究の俎上に上がってコンピューターを駆使して研究されることにより、われわれのこの分野に関する知識が今後さらに豊かにされてゆくことが期待される。とりわけ、上述のヤマーリの*Pramāṇavārttikālaṃkāraṭīkā Supariśuddhā*第1章の校訂は、現在まさにその作業が佳境に差し掛かっているところであり[*34]、近年中に校訂本が出版され、またそれに伴い電子テクストやKWICも公開されていくことになろう。このテ

クストはインド仏教論理学という学派の掉尾を飾る文献として、その解明には思想史的に大きな意義がある。人文情報学を駆使した国際的な研究協力体制のもとに、校訂作業が順調に進むことが期待される。

さらに、筆者も主体的にかかわっている *Pramāṇasamuccayaṭīkā* 全 6 章の校訂出版とそれに伴う電子テクストの公開ならびに KWIC 索引の作成、さらに *Pramāṇasamuccaya/vṛtti* 全 6 章のクォリティの高い還梵の作成が、この先数年のインド仏教論理学研究の最重要課題の一つであることは言うまでもない。これに関しても、主としてオーストリア科学アカデミーと中国蔵学研究中心、それに日本人学者の国際的研究協力のもと、これまでに確立されたコンピューターを駆使した方法論に基づき、研究を順調に進展させてゆきたい。

この研究はまた、ディグナーガの『因明正理門論』を媒介して東アジアの因明の研究にも貢献できることが示されつつあり[*35]、今後はとりわけ日本で書かれた因明文献、例えば善珠（ぜんじゅ）の『明燈抄（みょうとうしょう）』や蔵俊（ぞうしゅん）の『因明大疏抄（たいそしょう）』のマークアップを伴った電子データベースを作ったり（その際には、古写経を参照したり、国文学の研究者に助言を求めたり、といった作業も必要になろう）、さらに江戸時代にリヴァイバルした『正理門論』註釈伝統の所産（まだ研究の俎上に載ったことのない興味深い文献が多数存在していることが判明している）の研究などにつながってゆく可能性がある[*36]。

最後に、インド仏教論理学の人文情報学的研究の最終的着地点として筆者が現在なお想像しているのは、各テキストの包括的なコンコーダンスの作成に基づいて、ディグナーガとダルマキールティの作品を中心に置いたインド仏教論理学の諸文献のネットワーク型データベースを作ることである。このアイデアはすでに 10 年以上前に筆者が科研費萌芽研究「インド仏教哲学文献のネットワーク型テクスト・データベースの構築」（2005-2006 年）で構想したことがあるが、当時はまだ時期尚早で目に見える具体的な成果につなげることはできなかった。その後 15 年近くが経過して、現在少しその方向性が見えてきた気がしている。それというのも、*mūla*-text としての *Pramāṇasamuccayavṛtti* 全体の精度の高いリコンストラクションの作成が現実味を帯びてきたからである。このテクストを基盤に置いて、ダルマキールティの *Pramāṇavārttika*、そしてその諸註釈、複註といった階層構造を利用して、インド仏教論理学の諸テクスト

の電子データを統合して相互にリンクさせて仏教論理学の思想潮流の諸電子テクストを包括的にネットワーク化し、さらに原典写本の画像や翻訳研究、思想史や思想内容を論じた二次文献のリンクを張ることにより、インド仏教論理学研究のプラットフォームとするという遠大な構想である。どれほどの時間がかかるのか、あるいはこうした営みに真に学問的意義があるのかは、正直まだ筆者自身にもはっきりとはわからないが、差し当たって一つの方向性としてここにその構想を再提示し、本稿を終えることとしたい。

付記

私事ではあるが筆者は昨年還暦を迎えた。その年齢に免じて、この未来志向のプロジェクトの成果報告書に、こうした半ば回顧的なエッセイを寄稿したことをお許しいただきたい。ついでにもう一つベテラン研究者の視点からの問いかけをしておきたい。斯学のパソコン利用第一世代の研究者（ここでは筆者を含む60代以上の研究者を指すものとする）の高齢化が進む現時点で考えておきたいことがある：彼らのパソコンの記憶装置上の「研究ノート」類を後進のために役立てる手立てはないか？

そもそも人文学の発展の歩みを遅くしている理由の一つに、人文学研究における「個人主義」とでも称すべき側面がある。論文や著書として公表された成果以外の、ひとりの研究者が研究途上で開発・作成したさまざまなツールやデータは、多くの場合その個人の研究活動の終焉とともに後代に継承されることなく消滅してしまう。筆者には、2011年秋に恩師である故・三枝充悳（さいぐさみつよし）先生の書斎・書庫を整理させていただいた際、先生が専門にされていた『大智度論（だいちどろん）』や初期仏教関連の膨大なカード類や研究ノートを見いだし、その貴重さを認識すると同時に、その扱いの困難さに呆然とした思い出がある。パソコン登場以前には致し方なかったこうした「研究ノート」類の散逸に関しては、パソコン利用第一世代がリタイアしはじめる今後は何らかの対応が可能とも考えられる。というのも、彼らパソコン利用第一世代以降の研究者は多くの場合、「研究ノート」類を電子ファイルとして残しているはずであり、そうした研究上の「遺産」を利用可能な形で公共空間に移しておけば、後進の研究者に役立つ可能性がある。

例えば、未公開のさまざまな電子テクストの入力データ、チベット語大蔵経

の複数の版を対照したテクスト・データ、註釈文献のコンコーダンス、特定写本の文字リストの画像、術語を外国語訳する際に用いる対照語彙リスト、論文の PDF ファイル、等々の普遍的に利用価値のあるデータで、一定のクォリティを備えていながら未公開のものが、一人一人の研究者のパソコンの記憶装置上に多数存在しているはずである（フラウワルナー蔵書の「書き込み」のように、情報のクォリティ次第では蔵書の PDF が価値を持つ場合すらある）。これらを適切な形で集積して、後進の研究利用に供するのである。

以上が実現可能になるためには学会レベルでの何らかの共通フォーマットの設定が必要であろう。学会でそうした統一フォーマット、ないしプラットフォームを作ったらどうだろうか。なお、自らのパソコンの記憶装置上の遺産を有意義な形で残すための作業は、あくまで引退研究者自身によって行われる利他行でなければならないことを、念のために最後に強調しておきたい。

注

1　小野基「『如実論』について」『印仏研』65/2（2017/3）905-912; 小野基「Vādavidhi の誤難論とディグナーガの批判」『インド論理学研究』10（2017/11）43-92; 小野基「『因明正理門論』過類段偈頌の原文推定とその問題点」『印仏研』66/1（2017/12）450-456; 小野基「中観派における過類（*jāti*）」『印仏研』67/2（2019）902-909; M. Ono, The Importance of the *Pramāṇasamuccayaṭīkā* Manuscript for Research on the Buddhist *Vāda* Tradition. In: *Sanskrit Manuscripts in China III. Proceedings of a Panel at the 2016 Beijing International Seminar on Tibetan Studies, August 1 to 4*. Ed. by B. Kellner, J. Kramer, X. Li. Beijing 2020, 241-282. (forthcoming 1); M. Ono, “A Reconsideration of Pre-Dignāga Buddhist Texts on Logic – the **Upāyahṛdaya*, the Dialectical Portion of the Spitzer Manuscript and the **Tarkaśāstra*.” In: *The Proceedings of the panel “Transmission and Transformation of Buddhist Logic and Epistemology in East Asia” of the IABS Toronto. Toronto. 20-25. August 2017*. Ed. by Sh. Moriyama (forthcoming 2).

2　金沢篤氏はかつて「パソコンを活用してのインド学・仏教学研究は、すべて、この電子テキストを前提としてのものである」と喝破されたが（cf. 金沢篤「パソコン時代のインド学（二）―― サンスクリット文献の電子テキスト、その有用性と問題点――」『駒澤大学佛教学部論集』31（2000）356-386）、現在でも基本的に事情は変わらないであろう。ただし、原典写本の画像データの集積・公開なども文献学的なインド学仏教学研究にとって非常に重要な課題になってきており、その方向の進展は、落合俊典氏の日本古写経データベース・プロジェクトに代表されるように、過去の 20 年間に特に顕著であったと言えよう。

3　このプロジェクトは、後述の小田淳一氏とその盟友の高木哲也氏（筆者の筑波大学・宗教学比較思想学研究室での先輩）の着想に端を発していることをここに銘記し、ご両人に改めて筆者の深い感謝の意を表したい。Dharmakīrti の *Pramāṇavārttikasvavṛtti* をはじめに入力し、その後順次 *Pramāṇavārttika*、*Hetubindu*（E. Steinkellner による還梵テクスト）、*Nyāyabindu*、*Sambandhaparīkṣā*、*Vādanyāya* を入力、後に GRETIL などに収録された。

4　このプロジェクトの遂行に際しては当初から江島惠教氏より温かい激励を頂戴し、筆者らは、その内容を氏が主宰した 1986 年度の日本印度学仏教学会学術大会のシンポジウム（「インド学仏教学におけるコンピュータ利用」について）で報告する機会を与えられた（cf. 小野基・小田淳一「サンスクリット文献の索引作成に関する大型計算機の応用」『印仏研』35/2（1987）862-859）。当時印仏学会は書誌データベースのコンピュータによる作成に取り組んでいたが、江島氏はすでに早くから電子テクスト・データベースの重要性を看破しており、それが氏の SAT プロジェクトの推進にもつながったものと思われる。

5　Śaṅkarasvāmin の *Nyāyapraveśaka*、Śākyabuddhi の *Pramāṇavārttikaṭīkā* の梵文の一部、Karṇakagomin の *Pramāṇavārttikasvavṛttiṭīkā*、Arcaṭa の *Hetubinduṭīkā*（Krasser）、Durvekamiśra の *Hetubinduṭīkāloka* と *Dharmottarapradīpa*（Krasser）、Dharmottara の *Nyāyabinduṭīkā*、Prajñākaragupta の *Pramāṇavārttikālaṃkāra*、Śāntarakṣita/Kamalaśīla の *Tattvasaṃgraha/-pañjikā*、*Vādanyāyaṭīkā*、Jitāri の *Hetutattvopadeśa*、*Jñānaśrīmitranibandhāvali*、*Ratnakīrtinibandhāvali*（Woo Jeson）、Ratnākaraśānti の Antarvyāptisamarthana（Kellner）、*Tarkarahasya*（Krasser）、Mokṣākaragupta の *Tarkabhāṣā*、Manorathanandin の *Pramāṇavārttikavṛtti*、Vibhūticandra の *Pramāṇavārttika Pariśiṣṭa*（SARIT）など。

6　http://gretil.sub.uni-goettingen.de/

7　http://sarit.indology.info/sarit-pm/works/

8　なお仏教論理学文献ではないが、同分野の文献学的研究にとって重要なテクスト群として、中世ジャイナ教の哲学文献、すなわちアカランカの著作とその註釈、*Aṣṭasahasrī*、*Siddhiviniścayaṭīkā*、*Nyāyaviniścayavivaraṇa*、*Prameyakamalamārtaṇḍa*、*Sammatitarka*、*Nayacakra* など、ディグナーガやダルマキールティとその註釈文献への豊富な引用を含む大部の典籍群があるが、そのあたりのテクストの電子化は、管見の限りではやや遅れているように見受けられる。今後の包括的な電子化が強く期待される。

9　仏教論理学文献のチベット訳を利用するに際しては、デルゲ版・チョーネ版系統とは別に、ナルタン版・北京版系統の版本の組織的入力ないしそれらを用いた校合作業が、実のところかなり重要である。ただし仕事量に比べその画期性がデルゲ版入力プロジェクトに比して地味なため、その実現には困難が予想される。同じ問題は、大正蔵と木版大蔵経・古写経の電子化の関係についても当てはまるかもしれない。

10　Cf. E. Franco: *The Spitzer Manuscript. The Oldest Philosophical Manuscript in Sanskrit. Volume I-II*. Wien 2004.

11　http://idp.bbaw.de/　IDP: SHT 810.

12　Cf. Ono (forthcoming 2).

13　Cf. M. Ono, Y. Muroya, "*Vādavidhi's Theory of False Rejoinders (Jāti)* - An English Translation of Fragments and Their Parallel Passages in the *Rushi lun* -."《論軌》與《如實論》「誤難」研究工作坊 . 国立政治大学宗教研究所・哲学系仏教哲学研究室 . 台北 . 26-28. April 2018 (unpublished). また、日本古写経を用いた『方便心論（ほうべんしんろん）』に関する画期的研究として、室屋安孝「漢訳『方便心論』の金剛寺本と興聖寺本をめぐって」『日本古写経研究所研究紀要』1（2016）12-35、がある。

14　Cf. Motoi Ono, Jun'ichi Oda, and Jun Takashima, *KWIC Index to the Sanskrit Texts of Dharmakīrti*. Lexicological Studies 8. Tokyo 1996. その後、オーストリア科学アカデミーアジア文化宗教史研究所と東京外大 AA 研から Web 公開された（cf. http://www.ikga.oeaw.ac.at/Mat/kwic_dharmakirti.pdf）。

15　M. Ono, J. Takashima: *Keyword In Context Index to Jinendrabuddhi's Viśālāmalavatī Pramāṇasamuccayaṭīkā Chapter I*: http://www.gicas.jp/publication/img/04-1.pdf）.

16　*Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya Chapter 1 and 2*. Critically edited by E. Steinkellner. Beijing/Vienna 2007; *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya Chapter 3*. Critically edited by P. Hugon and T. Tomabechi with a preface by T. J. F. Tillemans. Beijing/Vienna 2011; *Dharmakīrti's Hetubindu.* Critically edited by E. Steinkellner on the basis of preparatory work by H. Krasser with a transliteration of the Gilgit fragment by K. Wille. Beijing/Vienna 2016.

17　後述するようにダルマキールティ全作品の KWIC 索引の改訂版を作成して出版する予定のため、この *Pramāṇaviniścaya* 単独の KWIC 索引は紙媒体としては出版せずもっぱら Web 上の公開にとどめている。http://www.ikga.oeaw.ac.at/mediawiki/images/7/71/Kwic_pramanaviniscaya2015.pdf

18　なお、ダルマキールティ著作とその註釈文献の梵文写本に関してはその後も五月雨式に新写本が登場しており（*Pramāṇaviniścaya* の新出写本など）、それらに関する研究成果をも参照しながら電子テクストを常に改訂してゆく作業も必要である。Cf. E. Steinkellner: *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya, Chapters 1 and 2*. Critically edited 2007 (STTAR 2): Further and Last Corrigenda and Addenda (November 2018). http://www.ikga.oeaw.ac.at/mediawiki/images/7/71/Steinkellner_PVin_1-2_corrigenda_and_addenda_2018.pdf

19　今後は新しいテクストの校訂者が一定のフォーマットの下で同時に電子テクストを公開することができる経路を作るのが望ましい。またその際、KWIC 索引用の分綴テクストも同時に作っておくと、なおよい（cf. 金沢 2000: 374-375）。

20　この点は電子データの入力や作成、Web ページの作成・公開などの営為が学問的

業績として正当に評価されてこなかったという問題とも関りがあろう。作成者側からすると、公開して他人の使用に供する営為が単なる親切としか見なされないならば、公開物の正確さへの責任を問われるいわれはない。

21　なお、刊本テクストから入力された電子データに関しては、上記のように校正を進める必要とともに、実はさらにその刊本テクストの校訂の妥当性自体をも問題にする必要があり（筆者ほかによる Prajñākaragupta の研究などを参照）、それとともに出版校訂本が基づいた写本一次資料の画像データの公開が要請されてくる（Prajñākaragupta などに関しては 1998 年の渡辺重朗氏による原典写本ファクシミリの出版が画期的だった）。最近では *Tattvasaṃgraha/pañjikā* など、事実上かなり広範に研究利用が許可されている重要写本がいくつか見受けられるが、今後はそれらを所蔵機関と交渉した上で正式に Web 公開する方途を探る必要があろう。

22　また KWIC と並んで従来需要が高いのが梵蔵（ぼんぞう）対照索引に代表される多言語索引であるが、これを梵蔵漢英日などの諸語にも拡張し、効率的に作成する方法が探求されるべきであろう。ハンブルク大学のドルジ・ワンチュク氏、オルナ・アルモギ氏が推進する ITLR のような大規模プロジェクトは最終的には多言語索引の機能も含み得るものであるが、筆者は差し当たってダルマキールティ全作品の梵蔵対照索引の作成を目標に、この問題に取り組もうと考えている。

23　この写本、さらにそれに続くチベット伝来の数多くの梵文写本の研究を可能にしたシュタインケルナー氏を中心とする人々の尽力については、以下のエッセイを参照。Cf. E. Steinkellner, A Tale of Leaves - On Sanskrit Manuscripts inTibet, their Past and their Future. Royal Netherlands Academy of Arts and Sciences. Amsterdam 2004: http://www.ikga.oeaw.ac.at/Mat/steinkellner_leaves.pdf

24　*Pramāṇasamuccayaṭīkā* 全 6 章の校訂プロジェクトはすでに第 1 章と第 2 章の校訂出版を終え（cf. *Jinendrabuddhi's Viśālāmalavatī Pramāṇasamuccayaṭīkā. Chapter 1. Part I: Critical Edition*. Ed. by E. Steinkellner, H. Krasser, H. Lasic. Beijing/Vienna 2005: *Jinendrabuddhi's Viśālāmalavatī Pramāṇasamuccayaṭīkā*. Chapter 2. Part I: Critical Edition. Ed. by H. Lasic, H. Krasser, E. Steinkellner. Beijing/Vienna 2012）、残る第 3・4 章（桂紹隆・渡辺俊和ら担当）、第 5 章（H. Lasic、P. McAllister 担当）、第 6 章（小野基・室屋安孝・渡辺俊和担当）の校訂本出版に向け、現在鋭意作業が進められている。

25　E. Steinkellner, *Dignāga's Pramāṇasamuccaya, Chapter 1. A hypothetical reconstruction of the Sanskrit text with the help of the two Tibetan translations on the basis of the hitherto known Sanskrit fragments and the linguistic materials gained from Jinendrabuddhi's Ṭīkā*. 2005; http://www.ikga.oeaw.ac.at/Mat/dignaga_PS_1.pdf

26　E. Steinkellner, *Early Indian Epistemology and Logic: Fragments from Jinendrabuddhi's Pramāṇasamuccayaṭīkā 1 and 2*. Tokyo 2017 (Studia Philologica Buddhica, Monograph Series XXXV, xxviii + 282 S.). 後述のように、この労作も Web 公開が望まれる。

27　Cf. Steinkellner et al. 2005: xxvii.

28　Cf. Steinkellner 2005: iii-ix.

29　トゥッチによる漢訳『方便心論』『如実論』の「梵訳」は、現今の方法論的に厳密な梵文リコンストラクションとはまったく異質なものであるが、それでもあながち無意味とばかりは言えない。例えばフランコ氏は、Spitzer 写本の記述と『如実論』「無道理難品」の内容の類似性に気づくに際して、トゥッチの梵訳からインスピレーションを得ている（cf. Franco 2004: 465）

30　そうした認識に立って、桂博士と筆者は本偈（ほんげ）の部分のみではあるが *Pramāṇasamuccaya* 第 3、4、6 章の再建梵文を公表してきた。Cf. Sh. Katsura, Rediscovering Dignāga through Jinendrabuddhi. *Sanskrit manuscripts in China. Proceedings of a panel at the 2008 Beijing Seminar on Tibetan Studies. October 13 to 17*. Ed. E. Steinkellner in cooperation with Duan Qing, H. Krasser. Beijing 2009, 153-166; Sh. Katsura, A Report on the Study of Sanskrit Manuscript of the *Pramāṇasamuccayaṭīkā* Chapter 3. *Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū* 59/3 (2011) 1237-1244; Sh. Katsura, A Report on the Study of Sanskrit Manuscript of the *Pramāṇasamuccayaṭīkā* Chapter 4: Recovering the Example Section of the *Nyāyamukha. Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū* 64/3 (2016) 1237-1245; Ono (forthcoming 1)。また筆者のグループでは、散文部分を含めた *Pramāṇasamuccayavṛtti* 第 6 章全体の再建梵文の作成と、対応する『因明正理門論』後半部の再建（cf. 小野 2017/12）も進めている。

31　Japan-Austria International Symposium on Transmission and Tradition: The meaning of “fragments” in Indian philosophy (20-24 Aug., 2012), organized by H. Marui and E. Prets.

32　Cf. Steinkellner 2017; 小野 2017/11.

33　上記の国際シンポジウムを主導したプレッツ氏は、Fragments of Indian Philosophy という Web サイトを立ち上げ（cf. http://nyaya.oeaw.ac.at/cgi-bin/index.pl）、この方向性での貢献を模索している。

34　2019 年 6 月 28 日から 7 月 1 日にかけてライプツィヒ大学のフランコ氏が同写本の国際ワークショップを開催し、10 人を超える日本人研究者（筆者を含む）が参加した。

35　注 1 に提示した拙論を参照。

36　上述した筆者を研究代表者とする現在進行中の科研費基盤研究Bプロジェクト「インド論理学と東アジアの因明を架橋する『因明正理門論』の再検討」は、こうした点をも射程に入れている。